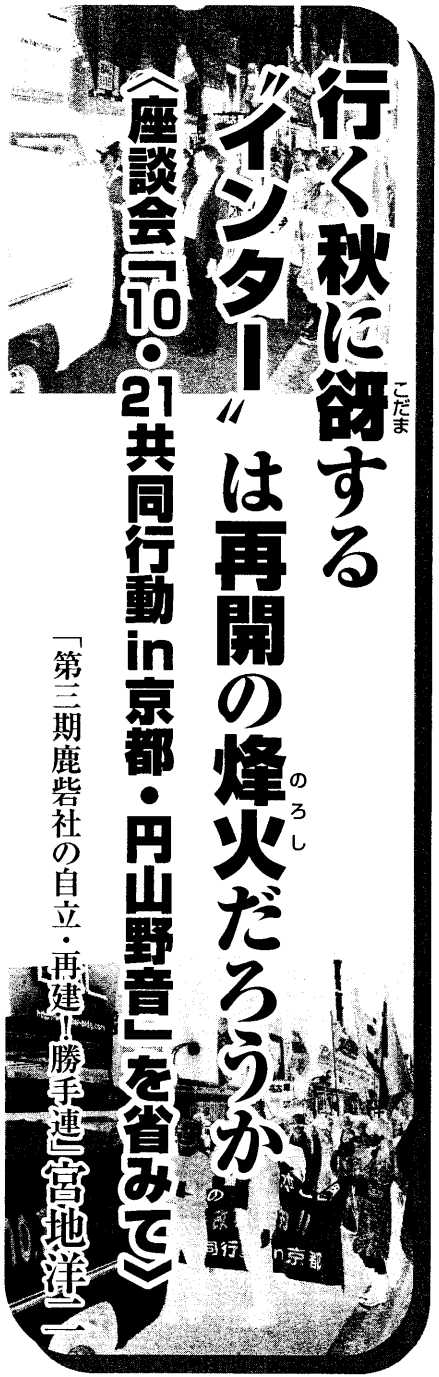
月刊『紙の爆弾』二〇〇八年一月号（鹿砦社）掲載

行く秋に谺（こだま）する〝インター〟は再開の烽火（のろし）だろうか

《座談会『10・21共同行動in京都・円山野音』を省みて》

「第三期鹿砦社の自立・再建！勝手連」宮地洋一



本誌前号コラム「徒然なるままに2戦いすんで……今はもう秋」に、鹿砦社代表・松岡利康は「10・21国際反戦デー」に関する私的現場報告を綴っている。

その内容を知った田川晴信から、一部は照れ隠しの、大半は真剣な抗議の電話がかかってきたという。

「これじゃまるで〝同志社の同窓会〟みたいやなあ……」

と、一年間の長丁場を裏方に徹して乗り切ってきた、事務局メンバーは呟いた。

事実、この日の共同行動は（大学）学生運動や（旧・新左翼系）党派の同窓会的な水準をまったく超越した地平で、「民衆の私闘の束ね」ともいうべき「市民運動立体的統一戦線」の萌芽を実現させたと筆者は感じる。

頁数と締切りの関係で局部的に留まった前号の「松岡報告」を補足しつつ、この共同行動の成功の全体像を全国の読者に伝えるべく、本座談会は急遽企画された。

「10・21」を省みる座談会
〈参加者〉仲尾宏・田川晴信・寺田道郎・工藤美彌子（司会・文責　宮地洋一）
二〇〇七年十一月八日　於京都　彌光庵

総体の感想と今後の見通し

仲尾　何十年来できなかった大集会が実現できた。上は僕ら一九五〇年代に活動

を始めた者から下は現役の学生諸君までが、上からの組織動員でなく、個々の自主性で集まった点がまず評価できる。個人的にうれしかったのは、五〇年代前半に朱雀高校で停学処分に抗しながら「社研」を起ち上げ、平和運動や破防法闘争をやったときの仲間が、名古屋、大垣、宝塚、奈良などから参加しカンパもしてくれたこと。運動が死んでいないと実感した。

大衆運動の盛り上がりの予兆は昨年東京・日比谷公園で開かれた「6・15」を皮切りにして、各種の裁判闘争や市民運動に現れていた。このところ主催者の予想を大きく上回る結集が続いていた。そのため10・21についても、成功の確信が七月段階で生まれ始めていた。でも一〇〇〇人はしんどいかなと思っていたのに、一二〇〇人の結集、裾野の広がりを感じる。

今後については参院選での自民党敗北という政治状況下だが、「憲法九条改憲阻止」で、民主党がまとまる条件はなく目を離せない。少なくともここ六年間、そこに最大の焦点を合わせた統一戦線を組まなければならない。ただ同じ選挙で「9条ネット」がうまくいかなかったように、政治潮流や党派の形成は焦らず慎重に進めるべきだ。

それとは別に、10・21のような市民運動の結び目をみんなが求めていることが今回示されたのだから、田川さんにももう一肌も二肌も脱いでもらって（一同笑）、〇八年の10・21をもう一度成功させたい。

田川　「おかしい、これはいかん」と感じることについて、手を挙げ行動に移すことが、長い間少なすぎた。それでここ一、二年、「誰かがしないといけない」という気持ちで動いてきた。確かに裁判闘争に勝利するなどが部分的にあったものの、多くは抑圧された側がやむなく裁判を起こす、などという闘争に終始されてきたのが現状ではないか。

今回のことでそれが出来たかどうかは別にして、「権力に真っ向から迫る」動きを開始せなあかんというのが僕のモチーフにあった。その意味で円山野音を超満員にしてみたかった。そこまではいかなかったけれど、あれだけの人が参加してくれ、後輩たちが鎌倉、鳥取、広島などから来てくれたり、長い間断絶されていた繋がりが再開されるきっかけは生み出せたと思う。僕らはどう生きても後十～十五年の世代やから（笑い）、次に若い人にどう繋げていくかという課題を背負っている。

地域や統制下とはいえ職場でもいろんな運動があり継続した努力がなされている。けれどそれは「明日をどうする」という改良闘争に留まらざるを得ず、「世の中を根底から変える」闘いを相対的独自に同時に進める必要がある。その原点はバスチーユの例を引くまでもなく、民衆の街頭からの蜂起にあると思う。事務局のみんなが懸命に動いてくれて、僕らはそれに乗っかっていただけだから、来年については、みんなが決めてくれたらそれに従いたいと考えている。

寺田　昨年から田川さんに誘われて事務局を引き受けた理由は、安倍政権の〝美国〟路線を許してはいけないし、七月の参院選で自民党の動きを止めなあかん年だ、というものだった。新テロ特措法成立阻止という目標もあったが、直前に安倍政権が転けたので人が集まるか心配したが、沖縄の十一万人集会などの好影響も受けて成功した。五、六百人が京都から、残りが大阪、神戸をはじめ各地から集まってくれたのだと思う。いろんな団体の代表格が様子を見に来ていた面もあり、実行委員会総括会議（十一月三十日実施予定）で意見を集約した上で、来年への継続を前提にどこでどのような内容でやるのかを早めに提起すべきだ。

舞台の上（司会）から見て――

工藤　ゲストのPANTA、友部正人狙いや雨宮処凛ファンなどが相当来て、途中で退場してしまうかもと心配していたけれど、途中で帰ったのは実際にはそれぞれ十人ずつ位で、他の人は最後まで残っていた。そのような意味では、来年に継続するならもっと身近な手作りの内容に重点を置くべきだと思う。有名人を呼びすぎでは。

若者を育てなきゃというけれど、実行委でも集会でも若い人が喋れる雰囲気がなかったのでは。若い人どうですか？という問いかけもなかった。その若者たちからインターナショナルの歌詞を舞台上の何人かが忘れていたのを、「唄を忘れたカナリアの世代だ」と揶揄された。最後を締めて意気を揚げようという設定なのだから一考を要する。「ワルシャワ労働歌」をとの声もありました。

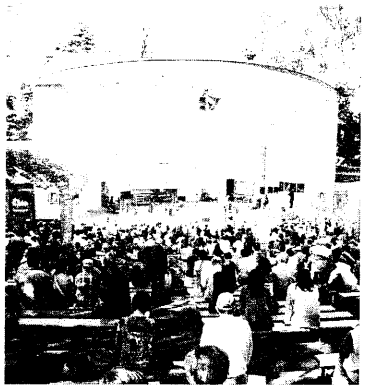
趙博（チョウ・バク）さんには時間の関係でプログラムにはあった演奏を取り止めた上、五分かかる「インター」を二分に縮めてもらったり気の毒な状態だったけれど、その影響もあったかも。また「何か運動が起こると歌が生まれる」というけれども、近年生まれていない状況や人によれば、長いブランクがあったことの現れかもしれない。

「10・21」の持つ歴史的意義

工藤　田川さんが五、六人の集いでこの話を初めて持ち出したとき、居合わせた若者が「10・21国際反戦デーってどんな由来ですか？」と質問したら、誰も系統立てて答えられなかった。どうして10・21が国際反戦デーなのかと、世界的にも日本でも何があったのかと、きっちり提起すべきでは？

寺田　僕らの世代には、映像で10・21街頭闘争を知る一方、総評の動員デモのイメージが強いから、印象は必ずしも良くない。六〇年代後半の10・21は確かにすごかったし、運動に入るきっかけにもなっているが。

仲尾　「あの10・21ですか」という答えを返してきた人たちは、六〇年代後半から七〇年の街頭闘争をイメージしている。



1200人を越える人々が終結した「10・21共同行動in京都」

「もともとはローザルクセンブルクの時代、ヨーロッパが発祥の地で……」と、冒頭のあいさつで触れようかとも思ったが、時間もないし、今回はその歴史にこだわらないというのが実行委の意向だったので省略した。

熟成を促した準備運動

寺田　今回、人が集まった大きな理由に、準備期間が非常に長かったことが挙げられる。相談会二回、実行委員会七回、拡大事務局会議二回と、それぞれの間に事務局会議をやったけれど、すべてオープンにして賛否両論を闘わせた。長かった分だけいろんな声を聞いたし、知恵を出し合いアイデアが生まれた。賛同人、賛同団体に次ぐ賛同店もその一つだった。

工藤　いくつもの店やＹＷＣＡなどにビを置かせてもらったが、各店のお客さんも何人か来ていて、「こんな集会初めてです！」と声をかけてくれた。いつも来ている常連メンバーでない人の輪をジワットでも広げていきたい。

仲尾　米澤（鐵志）さんの「被爆体験」を皮切りに、毎回の実行委で「闘争現場からの報告」を積み重ねた。事務的な連絡や技術面での討議に止まらず、あんな運動もあったのかこんな運動もあるのかと、実行委員の耳と心に印象深く残った。来年の実行委員会でも毎回文化活動を含む「実践現場からの報告・学習会」を行うとともに、二カ月に一回でもいいから、『実行委ニュース』を発行し、情報を発信し続けるべきだろう。また今回効果を発揮した各地の集会や会合へ出かけていって訴える〝出前宣伝〟も足を運ぶ手法として繰り返していく必要を感じる。

「音楽」の効果

田川　最初は「ゲストを呼ぶのなら有料にしよう」と提案したが、みんなの意見を容れて無料になった。ちょっとプロを呼びすぎた傾向はあるが、「友部正人がよかった」という人もいるし、パンタを初めて聴いた僕の娘なんかは『ライラのバラード』のＣＤを買い求めていた。「まーちゃんバンド」の大衆性は、何十年ぶりかの集会に来た学生運動の後輩たちには大受けだった。

工藤　個々の演技はすばらしかったけれど、わざわざ来ていただいて持ち時間が二、三〇分というのは失礼じゃないかしら。来年はメインバンド一つ、講演も一つ、後は現場報告をどんどん入れた方がいいと思う。

寺田　今回の現場報告はウトロ、無年金訴訟をはじめ全体としては好評だった。反戦ライブもよかったが、サウンドデモについては「大阪のグループがやるのなら」と、京都のメンバーが参加しなかったなど（内ゲバを知らない）若者たちの方が分裂気味だという点は今後の課題だと思う。

＊

集会後の河原町デモが意気揚々と繰り広げられたこと、心配された財政も多くの人々からの「賛同金」に加えて、三〇万余の「会場カンパ」で黒字に収まったことなど、〇八年への明るい木漏れ日に包まれた〝再会と再開のバラード〟、そんな円山野外音楽堂であった。

「10・21反戦共同行動ｉｎ京都」への賛同人、賛同団体、賛同店

《賛同人》　赤川祥夫、浅井桐子、味岡理一、飛鳥井けい子、天野博、荒井康裕、井上加代子、池内光宏、池田浩士、磯江みづえ、伊藤淳平、稲村守、李美葉、岩田吾郎、岩津雅典、上原教男、鵜飼哲、牛尾国彦、後義輝、卜部昌則、江口慶明、江原護、大川健二、大須賀護、大浜冬樹、大森昌也、大湾宗則、大管新、岡田雅憲、小川登、落合祥堯、越智洋三、甲斐布扶義、兼光雅宏、川島繁夫、川嶋澄夫、河村栄三、川村賢市、河村宗治郎、北里秀郎、北村信隆、木下昌朗、金千代、草刈孝昭、楠敏雄、工藤美彌子、黒木建、黒田伊彦、結柴誠一、厳本明夫、児玉利春、小武正教、纐纈厚、小西泰弘、小林圭二、駒井高之、駒見俊道、小山敏夫、ゴードン・ムアンギ、紺谷延子、斉藤真、酒井満、佐藤大、佐々木佳継、渋谷要、嶋川まき子、清水明美、清水義昭、徐龍達、白井美喜子、新開純也、新谷純一郎、末本雛子、須田稔、関俊子、高桑次郎、高鍬多恵子、高崎庄二、高瀬元通、高橋幸子、高橋秀典、高藪繁子、田川明子、田川晴信、瀧川順朗、武市常雄、竹内正三、竹内宙、竹田雅博、竹林伸幸、橘睦子、田中啓司、田中宏、谷川正幸、多比良建夫、田村博一、崔忠植、崔孝行、知花昌一、千葉宣義、塚本誠一、塚本泰史、鶴見俊輔、鄭早苗、寺田道男、戸梶博夫、徳田隆、土本顕、永井美由紀、仲尾宏、永岡浩一、中河由希夫、中北龍太郎、中嶋慎介、永島靖久、長田侃士、中田光信、中村在男、西浦隆男、西岡智、西方淳子、西浜楢和、蜷川泰司、野坂昭生、野田雄一、朴実、橋野高明、橋本利昭、服部良一、早川義輝、原田恵子、土方克彦、菱木康夫、日高六郎、広尾喜代志、府上征三、福山義和、藤井悦子、藤井健一、藤原史朗、二葉晃光、古川鐘二、古橋雅夫、哀梨花、堀清明、堀義明、堀井千恵子、本田克己、前川静雄、前田裕悟、蒔田直子、牧野一樹、増野徹、増本俊幸、松尾哲郎、松岡利康、松本修、水谷弘一、水野裕之、松野尾かおる、松川敦、松川洋裕、松崎吾郎、松田素二、松村尚洋、松村美会子、溝田彰、南勝次郎、南建、宮地洋二、宮路烈、宮本崇義、村上正和、持原好子、物江克男、森原秀樹、森本忠紀、柳田健、山地政司、山田実、山本純、山本猛、山本徳二、山本将嗣、横山美樹、吉岡史朗、吉田信吾、吉田宗弘、米澤鐵志、六島純雄、和田喜太郎、渡邊琢、渡辺亜人

《賛同団体》　アジア共同行動・京都、アジェンダ・プロジェクト、ＮＰＯ法人京都コリアン生活センター、大阪Ａ＆Ｕ、沖縄とともに基地撤去をめざす関西連絡会、関西共同行動、関西合同労働組合、京都「天皇制を問う」講座実行委員会、京都府教職員組合（きょうと教組）、九条旨酒の会、９条改憲阻止の会・関西、旧友会（60-70年安保京都高校生運動）、ぐるーぷちゃんぷるー、在日韓国・朝鮮人高齢者の年金訴訟を支える会、支え合う弱者の会・兵庫、消費者経済研究所、自立労働組合連合、タウンミーティング訴訟を支える会、高槻医療福祉労働組合、東西本願寺を結ぶ非戦・平和共同行動実行委員会、とめよう戦争への道！百万人署名運動・関西連絡会、とめよう戦争への道！百万人署名運動滋賀県連絡会、日本基督教団京都教区「教会と社会」特設委員会、日朝友好促進京都婦人会議、反戦反天皇制労働者ネットワーク、反戦老人クラブ京都、兵庫県被災者連絡会、ふぇみん婦人民主クラブ・京都洛友支部、百万人署名運動兵庫県連絡会、平和憲法の会・京都、平和の会・宇治、辺野古に基地を絶対につくらせない大阪行動、辺野古に基地はいらない滋賀行動、Ｐeace Media、星野文昭さんを取り戻す会・京滋、郵政人事交流＝強制配転に反対する近畿郵政労働者の会、梨花舞踊学院・リファダンスアリラン

《賛同店》　あーす書房、おてらハウス、キッチン・ハリーナ、呉服屋南商店、新羅、八文字屋、ほんやら洞、まほろば、彌光庵、論楽社、ベジタリアンダイニングCAFE PEACE、Cafe Terraza

（10月18日現在・順不同、193賛同人、37賛同団体、12賛同店）

＊なお、上記以外にも公表はできない多くの賛同人・賛同団体を得ていることを記しておきます。